

被爆 70 周年 ヒロシマを見つめる三部作  
第 1 部  
ライフ=ワーク

2015 年 7 月 18 日 (土) ~ 9 月 27 日 (日)

被爆 70 周年を迎える本年、広島市現代美術館では「ヒロシマを見つめる三部作」と題し、原爆被害を受けた広島の過去を振り返り、復興の軌跡を見つめ、「今」そして「これから」を考える、3つの異なる視点に基づいた展覧会を連続開催します。(第 2 部 俯瞰の世界図 [10 月 10 日~12 月 6 日]、第 3 部 ふぞろいなハーモニー [12 月 19 日~2016 年 3 月 6 日])

生きること (ライフ) と作品 (ワーク) との密接な関係。作り手の「生」が結晶化した作品が示す、体験共有の可能性

第一部「ライフ=ワーク」では、広島の被爆者たちがその体験をもとに描いた「原爆の絵」(広島平和記念資料館蔵)を出発点に、制作者の体験、生活、人生をとりわけ色濃く反映させる 13 作家の表現をあわせて紹介します。シベリヤ抑留体験をモチーフとした連作で広く知られる香月泰男や宮崎進、原爆により両親を失い、喪失と苦悩を創作活動へと結びつけた殿敷侃、晩年に広島の被爆樹木を多数描いた入野忠芳など、生きること (ライフ) と作品 (ワーク) が緊密に結びつく表現を探求します。生死と結びつき、人生に重大な影響を及ぼしたであろう出来事やトラウマに向き合うこと、あるいは、日々の生活を写しとること、さらには、それまでの人生を意味づけていくかのような制作行為など、それら「ライフ=ワーク」の有り様は、表現の根源をも照らし出すものといえます。

また、作り手の「生」が結晶化した作品が示しているのは、個人の体験を他者へ伝え、さらには時代的・文化的違いを超えた共有をはかるうえで美術が発揮しうる可能性でもあります。

●体験を描く

被爆者による「原爆の絵」、香月泰男、宮崎進

●遺されたもの

四國五郎、大道あや、殿敷侃、石内都、後藤靖香

●人生と作ること

入野忠芳、江上茂雄、吉村芳生、村上友晴、Tomoya、大木裕之

開催概要

【会期】	2015 年 7 月 18 日 (土) ~ 9 月 27 日 (日)
【開館時間】	午前 10 時~午後 5 時 ※入場は閉館 30 分前まで
【休館日】	月曜日 (ただし 7 月 20 日、9 月 21 日を除く)、 7 月 21 日 (火)、9 月 24 日 (木)
【観覧料】	一般 1,030 (820) 円、大学生 720 (620) 円、 高校生・65 歳以上 510 (410) 円 ※ ( ) 内は前売りおよび 30 人以上の団体料金 ※中学生以下は無料
【主催】	広島市現代美術館、中国新聞社
【後援】	広島県、広島市教育委員会、広島エフエム放送、尾道エフエム放送



小野木明《原爆の絵 (柱の下敷きになった母親とその助けを呼ぶ少女)》1974 年頃 広島平和記念資料館蔵



大道あや《しかけ花火》1970 年 ©Daido Aya



宮崎進《足 (凍傷)》1995 年



入野忠芳《精霊 08-2》2008 年 ©Irino Tadayoshi